

「74歳の誕生日」

2015年04月20日

昨日、私は74歳の誕生日を迎えた。旧満州の大連市で生まれ、6歳の時、大分県杵築市に家族7人で引き揚げた。ソ連兵や中国人に襲われることを恐れる難民の帰国だったことを記憶している。小学、中学、高校を杵築市で過ごした。引き揚げ者の貧しい生活で、家事を手伝う毎日だった。お蔭で働くことを当然として育った。高校生の時「青春の嵐」に襲われ、苦悩の中で、聖書の神と出会った。神学校に行き、勉強とアルバイトに追われたが、同じ目的を持つ仲間との6年間は楽しかった。副牧師の時、うつ病になり苦しんだ。この間、結婚し子どもを得た。宮崎県延岡市で8年間、埼玉県熊谷市で4年弱、牧師をした。若い時は、何が何だか分からず、牧師であろうと必死だった。そして、横浜で最も長い32年間を過ごしたことになる。開拓伝道をしたいと願い「洋光台港南台伝道所」に赴任した。伝道所は「横浜港南台教会」に育ち、礼拝堂を献堂し、自立した教会になったことは、感謝であった。妻の父・菊池吉弥牧師は現役のまま72歳で亡くなった。その年齢までは、牧師をしたいと思い、72歳まで働き、隠退した。若い牧師に引き継ぐことができ、安堵している。

私は、子どもの時から早く大人になりたかった。大人になれば、事柄が見え、言葉を持てるだろうと期待したからである。74歳になっても、見えず持てない自分を痛切に感じて、恥じている。人は皆、そうだと聞く。

私は聖書を読み、目の前が開かれた時の感激を忘れることができない。虚無の暗黒に引きずり込まれたところから、生きることに向かって勇気を与えられた。どんなに小さく貧しくとも、神は主イエスの十字架と復活によって、私を「よし、生きよ」と認めてくださる福音は何よりの喜びであった。以来、この喜びを伝える牧師になりたいと懸命に生きてきた。しかし、失敗と挫折を繰り返してきた。その失敗と挫折を通して、自分の弱さをイヤというほど知らされた。弱さの認識は人間理解を深めてくれたことは確かである。大人になって見えてきたことは人間の弱さ、罪深さである。パウロはコリント(二)12章9節、10節に「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」と書いている。この聖句に幾度、救われてきただろうか。

挫折や病気を経験しながらも、47年間、牧師として用いられたことに畏れをもって感謝している。隠退して1年が過ぎたが、改めて、いかに多くの人々に支えられ、生かされてきたかを実感している。今は責任から解放され、本当にのんびり過ごしている。菊池牧師から、愛は苦しむことだと教えられた。自分のためだけに時を費やす生活でいいのかと自責の念に駆られる。聖書を読み直し、思うことを信仰告白として、ホームページに書いている。そして、九条の会と脱原発の市民活動に参加している。参加者たちは熱心に、誠実に関わり、教えられ励まされている。私も色々な企画をし、具体的な発言をしていきたい。愛を生き、共にある平和を説かれた主イエスに対する信従の証をしたいと願っている。

老化現象は著しい。言葉が出てこないし、体力の衰えがある。これを受容し、与えられた今を素直に生きていきたいと思っている。